中華民国期児童雑誌に刻まれた戦争の記憶

東京都立大学大学院人文科学研究科
佐々木 睦

はじめに

本研究課題の目的は中華民国期に出版された児童雑誌の歴史資料としての価値に光を当て、そこに刻まれた戦争の記憶を読み解くこと、戦時下の児童の生活史を明らかにすることである。

中華民国期には児童教育重視の思潮に応じて数多くの児童雑誌が出版された。各年齢層、女子児童、科学普及等に特化した雑誌が各地で陸続と刊行された。このうち、民国11 年（1922）に当時の新文化の発信地であった上海で創刊された商務印書館の『児童画報』と『児童世界』、中華書局の『小朋友』の三誌が支配的雑誌で、中華民国期を通じて児童の教育と豊かな心の涵養に大きな役割を果たした。本研究においてもこの三誌が中心資料と位置づけられる。

この三誌の編集コンセプトはそれぞれ異なっているのだが、1932 年の第一次上海事変以後は、抗日救国のプロパガンダへと舵を切っていく。本報告書では、『小朋友』と『児童画報』の変遷を簡潔に述べた上で、『児童世界』が戦時下で果たした役割について重点的に説明したい[1]。

なお、報告書であることを鑑み、研究報告の終わりに研究成果の公開、海外出張、助成金の使途についても記させていただいた。

一、研究報告 ——戦争と児童雑誌

戦時下においてはあらゆるメディアが影響を受ける。児童雑誌もその例外ではない。誌面の変化は以下の項目に従って分析することが可能だ。

a.表紙、b.読物、c.読者投稿、d.ニュース記事、e.広告その他

本報告書ではとりわけ a.表紙、b.読物、c.読者投稿に着目しながら、その誌面の移り変わりを見ていきたい。

(1)『小朋友』

中華民国が近代国家として成長を遂げていく上での最重要の課題の一つに言語の問題があった。国民の識字率が低いことに加え、また共通言語も制定されておらず、共通

[1] なお、一部の内容は本研究予算の研究成果である「児童雑誌と戦争 ——『児童世界』を中心に 附：『児童世界』戦争関連記事目録（新 1 号～新 30 号）」、（東京都立大学『人文学報』518-12、2022 年 3 月）と重なっている。

言語を制定しようにも発音を表記するためのシステムもなかったのだ。国民の中華民国と同日に誕生した中華書局が出版した『小朋友』は、国民政府の悲願であった「国語」（国家の共通言語）と「注音字母（注音符号）」（国語を表記するためのシステム）の普及政策と連動した児童向けプロパガンダ誌という性格を持っており、政府の国語政策とも関わりの深い社長の陸費逵が推進の中心を担った。したがって、誌面にはこの「注音字母（注音符号）」が多用され（図 1）、これが『小朋友』の最大の特徴である。この記号の教育記事が他誌よりも多かったことは事実だが、読物も豊富で、「ピーターパン」や「人魚姫」などの外国作品や、オリジナルの荒唐無稽なファンタジー小説も多数掲載された。

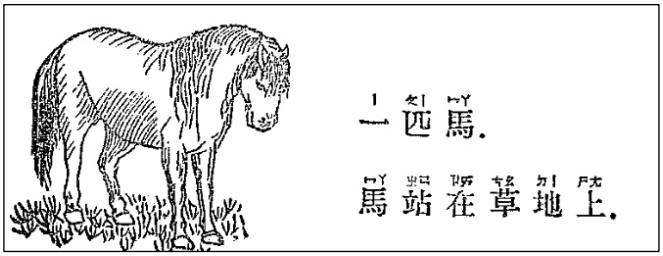

図 1 漢字の上の記号が注音字母（注音符号）

『小朋友』に関しては、表紙の変化の例を示したい。『小朋友』の表紙は期間ごとに動物、農村の風景などある一定のテーマを持っていた。図 2、図 3 が掲載された 1931 年 1 月は、子供の日常生活をテーマにした絵が表紙を飾っていた。この二号の表紙はい

図 2 『小朋友』第 534 期 1933.1.19

図 3 『小朋友』第 535 期 1933.1.26

ずれも子供の遊びを描いているようでいて、実は両者には顕著な差が認められる。図 2 はソファを馬車に見立てた遊び、図 3 は兵隊遊びにも見えるが、壁には「還我河山！（我が河と山を還せ！）」のスローガンが貼られ、地図は「東三省形勢略図」である。この当時は 1931 年（昭和 6 年）9 月 18 日の柳条湖事件に端を発する関東軍の東三省（奉天、吉林、黒竜江）占領が行なわれていた時期で、これに対する国内の不満と、抗

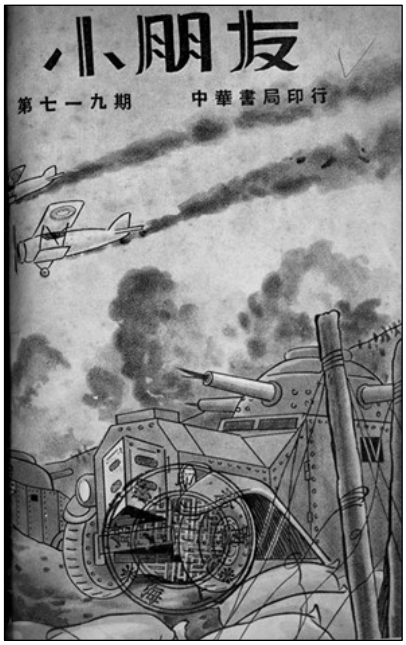

図 4 第 719 期
1936.8.6

図 5 『児童画報』第 8 期
1922.11.16 「小羊和悪狼」

日救国の意識の高まりをこの表紙は反映している。戦争が激化すると表紙も直截的な表現をとるものが多くなり、たとえば第 719 期では塹壕を踏み越していく戦車とその上空には二機の戦闘機が描かれている（図 4)。

(2)『児童画報』

『児童画報』と次の項目で取り上げる『児童世界』はいずれも商務印書館が発行していた児童雑誌で、直接日中戦争の被害を被っている。というのは、1932 年 1 月 28 日に勃発した第一次上海事変の際には商務印書館の社屋、工場が被災して出版業務そのものがしばらく停止を余儀なくされ、第二次上海事変時にも二誌は休刊、さらに戦争の激化に伴って『児童画報』編集部は香港に、『児童世界』編集部は武漢へと逃れ、それぞれの地で出版活動を続けたが、そのまま停刊に追い込まれているからだ。

『児童画報』は低年齢層向けの、絵を多めに配置した雑誌である。内容は童話的な読物や童謡が多く、そこに描かれているのは擬人化した動物たちや身の回りの道具たちで（図 5)、『小朋友』や『児童世界』に較べると、さほど確たるコンセプトを前面には押し出してはいなかったと言えよう。

誌面が一変するのは第一次上海事変での社屋の被災から復刊を遂げた新一号（1932.10.16）からである。最初に目に飛び込んでくるのは、日本海軍陸戦隊と中華民国の第十九路軍の戦いを描いた見開きである（図 6)。第一次上海事変は両国の児童雑誌に取り上げられた。日本側では爆弾を抱えて突撃し鉄条網を破壊した肉弾三勇士（爆弾三勇士）が英雄として持ち上げられ、児童雑誌のみならず国を挙げての大ブームとな

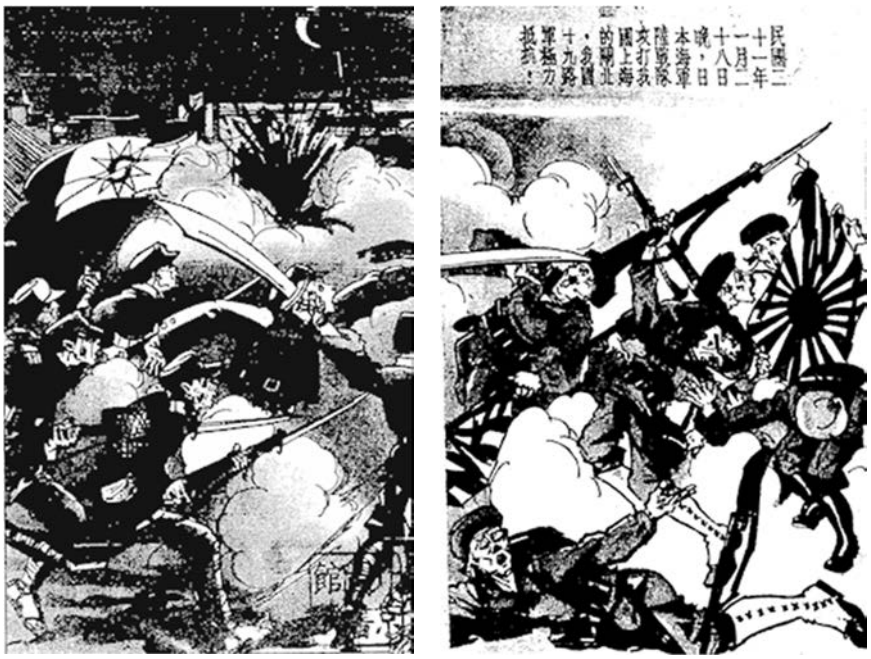

図 6 『児童世界』新 1 号
1932.10.16

った。一方、中国側では日本軍に激しく抵抗した第十九路軍を英雄として讃えると同時に破壊された上海の街と日本軍の蛮行を描くというように、両岸の見つめ方は対称性を見せる。

図 7『児童世界』新 1 号
1932.10.16

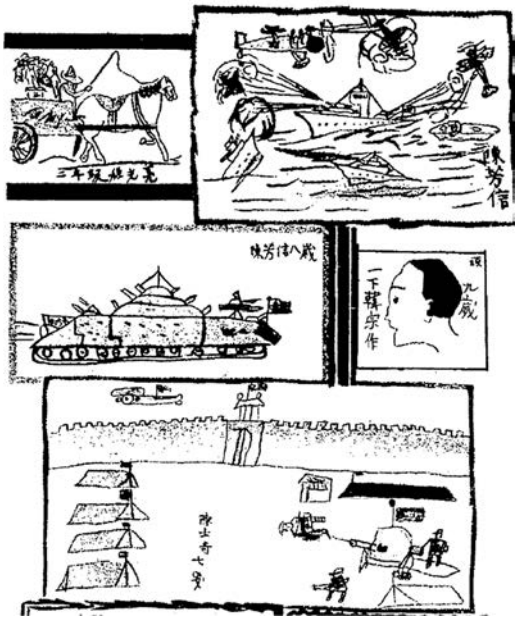

図 8『児童世界』新 106 号
1937.3.5

この次のページには商務印書館の工場が被災する様子を描いた絵が載る（図 7）。これらの絵からも明らかに低年齢層児童向けの誌面ではなくなっていることがうかがえ、それ以降も対象年齢層は比較的高く設定した内容が載るようになる。このことは戦時下の児童雑誌にしばしば見られる現象である。第一次上海事変後の抗日熱の高まりの後はしばらく一般的な内容に戻るが、時折戦争を反映した記事が掲載され、また児童の絵画にも兵器や戦闘場面を描くものが多く見られるようになる（図 8）。編集部が香港に逃れた 1939 年以降は戦争関連記事が多くなり、連載読物も「我国的民族英雄」といった民族色の濃いものとなった。

（3）『児童世界』

『児童世界』もまた商務印書館から刊行された民国期の代表的児童雑誌で、初代編集長であり、文学者としても知られる鄭振鐸の強い編集方針の下、識字率の向上と児童の豊かな心の涵養を目的に創刊された。その特徴として、文字だけの本を毛嫌いする児童の心を引きつけるという方針を明確に打ち出し豊富な図版を掲載すること、上質な外国の読物を数多く翻訳し掲載していることにある。編集長の鄭振鐸が刊行に先立っていくつかの新聞に掲載した「児童世界宣言」には日本の『赤い鳥』を参考にしたとも書かれている。この「宣言」では、共和国の児童に皇帝やお姫様のお話はどうかという批判に対し、物語の世界と現実の世界は別物という彼の主張が述べられている。

『児童世界』は二度の上海事変に伴う休刊時期を境にして三期に分けることができる。

第 1 期 1922～1932.1（創刊から第一次上海事変まで）
第 2 期 1932.10～1937.8（休刊後の復刊から第二次上海事変まで）
第 3 期 1937～1941（再復刊から停刊・終刊まで）

第 2 期以降は軍国民教育的な内容が誌面から顕著にうかがわれるようになる。本研究課題の下、『児童世界』が戦時体制において抗日愛国一色のプロパガンダ誌へと変貌するプロセスの解明を行なったが、それについてはこの第 2 期が重要な鍵となる。

第 7 期（1933.1.1）の「国防専号（国防特集号）」は第 2 期の抗日愛国運動の最初のピークであった。「国防専号」の内容を以下に示そう。なお、原文の漢字は繁体字（旧字体）だが、ここでは常用漢字で表記する。［　］に著者名を記す。

表紙　国旗下的小英雄（図 9）

広告　商務印書館復業紀念大廉価
銅版插図　大戦的一幕
編輯的話

巻頭語　（一）羊和狼、（二）和平之神
［趙景源］
　　戦争与和平［魏志澄］
歌曲　大軍進行曲［沈秉廉］
（以下、その他の読物）
　　火薬［編者］
　　国防模型製作法［亮寰］
　　毒気和防御法［鄒尚熊］
　　軍備与糧食［紹緒］
　　航空機［周建人］
　　海軍軍備［沈百英］
　　潜水艇［仁壽］
　　鉄甲車和坦克車［趙夐］
　　槍［趙景源］
　　軍隊的通信法［仁壽］
　　砲［趙景源］
補白　永永記着!!／手榴弾／軍備怎様拡充起来的／深水炸弾／我們的誓詞
※補白は記事の空欄に挿入された短い読物

図 9『児童世界』新 7 号
1933.1.16

国防特集号だけあって、始まりから終わりまで、全ての内容が戦争と関わっている。しかしそれは『児童世界』の将来の姿を暗示している。ちなみにこの号は、先に図 3 として掲げた『小朋友』第 535 期（1933.1.26）と発行時期がだいたい同じであり、このことからも国内に抗日救国の雰囲気が溢れていたことがうかがい知れる。

「羊和狼（羊と狼）」は児童読物の定番である狼対羊の物語が侵略者とそれに団結して立ち向かう抵抗者の物語に書き換えられている。他の物語も同様で、それまで強い動物におびえるか弱き存在として描かれていた山羊や羊やアリたちは、団結し、抵抗し、勝利を得るべき象徴としてそのイメージが再編成されていった。むろんそれが自分たちのあるべき姿を託したものあることは言うまでもない。ここにおいて、創刊時の編集長鄭振鐸の主張であった、物語の世界と現実の世界は別物とする初期の方針は完全に覆され、両者は密接にリンクするものとして立ち現れている。

また従来『児童世界』に掲載された歌曲は言うなれば学校の唱歌のようなものであったが、これも戦時体制下で姿を変えていく。ここに掲載された「大軍進行曲」は以下のような歌詞である（図 10）。

　　進め、前へ前へ前へ進め、進め、前へ前へ前へ進め
　　体中の血と肉は民族に捧げ、国恥を雪ぎ復讐を遂げると誓うのだ
　　進め、前へ前へ前へ進め、進め、前へ前へ前へ進め

敵どもは横暴に上海を破壊し野心で満洲を奪う
たび重なる惨劇を心に刻め！
（以下略）

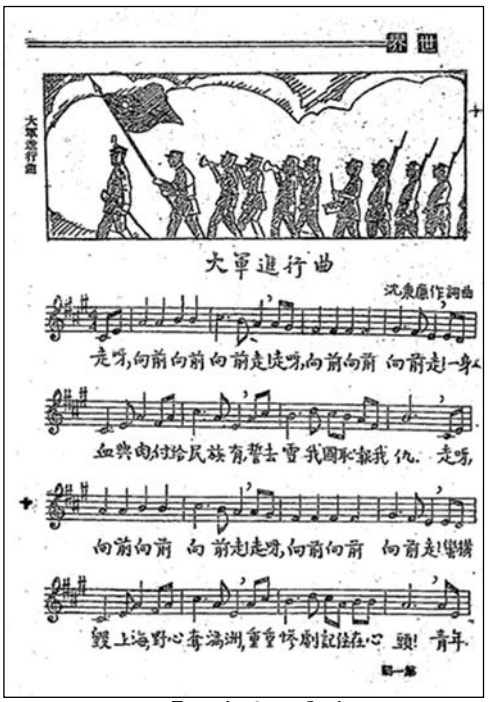

図 10『児童世界』新 7 号
1933.1.16

『児童世界』が抗日愛国一色のプロパガンダ誌へと変貌するプロセスにおいて見られる現象を以下のようにまとめることが可能だ。

（a）物語の変容 ——先に示した狼対羊の物語やアリの戦争の物語など、あらゆる物語が民族の団結と抵抗など戦時体制向けの話に作り変えられていく。

（b）自由画のコーナー ——抗日戦争をテーマにした募集が行なわれた。

（c）作文コンテストと読者投稿コーナー ——作文投稿欄には戦災体験、敵国への憎しみ、兵士への慰め等々が掲載された。優秀作文を目指しながら、自らを「愛国児童」化していく過程が読み取れる。

ここで特に注目したいのは（b）と（c）である。まず（b）に関してだが、中華民国期の各児童雑誌に掲載された自由画は、おそらく日本で山本鼎が推進した自由画教育運動の影響を受けている。お手本を模写するのではなく、自分の感じたままに書くという自由画は、「花」などのテーマが与えられることはあっても、表現方法には自由さが求められた。新 13 号（1933.4.1）に絵画コンテストの応募（「第二次懸賞——図画比賽）が掲載されたが、この募集では「野戦」というテーマが与えられた他に、以下のように描く内容に細かい規定があった。

十数人の児童が野戦の訓練をしている。
彼らは二つの部隊をなし、一隊は中国兵、一隊は外国兵である。
中国兵は土山を守り、外国兵が侵攻する。

はたしてこれが「自由画」と呼べるかは疑問である。この絵画コンテストの優秀作は、新 25 号（1933.10.1）で発表されたが、掲載された 10 作品は、描き方が限定されていたせいか、どれも似たり寄ったりであった。

（c）読者投稿コーナーは『児童世界』の売りとも言え、児童の作文能力を向上させる役割を果たした。新 1 号（1932.10.16）の巻末には「第一次徴文比賽作文（第一回作文

コンテスト)」の募集が掲載されている。テーマは「対於児童世界復刊後的感想和希望（『児童世界』復刊についての感想と希望)」というもので、これには千通を超える応募があった。この優秀作品が新 8 号（1933.1.16)、新 9 号（1933.2.1）に 10 篇ずつ掲載された。いずれも『児童世界』の復刊を喜ぶ声に満ちているが、今後増やして欲しい内容の希望については、日本の暴虐行為の記事、健康に関する記事や愛国故事を増やしてくださいという希望が複数あった。

その中でもやや異質なのが、新 9 号に掲載された遠季子という児童の投稿だ。新 1 号が届いた夜に、作文募集への投稿を勧めてくれた兄とのやり取りの中で、兄が日本軍の暴虐について書くことを提案し始めると、彼は続けて文章の構想を語る。

> 僕はとっさに口を挟んで言いました。「ああっ！ この『児童世界』は救国思想についての文章が少ない傾向があるね。」お兄さんはうなずき、僕は得意になって続けてこう言いました。「国が滅びようとしている時に、それでも急いで救国をしようとしないのですか？ もし『児童世界』が、我々みんなを訓練して愛国の小英雄にしてくれるなら生死は顧みません。敵を一斉に打倒したら、それはなんと国家に有益なことでしょう！―『児童世界』は全国に普及していて、宣伝にとっても便利です、だから僕は救国思想を鼓舞する文章が多ければ多いほどいいと思います！」

この作文は、新 9 号掲載作のトップに選ばれただけあって、他の作品より抜きん出ている。特に今後の希望を述べるくだりで、救国思想についての文章が少ないという『児童世界』の「弱点」を指摘していることは注目に値する。また、『児童世界』に愛国小英雄の育成や救国思想宣伝の媒体になることの期待を寄せるなど、その後の『児童世界』の果たした役割を振り返って見るならば、著しい先見の明をもっていたと言えよう。

自由な作文を掲載するのが「児童作品」や「児童通信」のコーナーであり、読者たちがその時代をどう見つめてきたのかを知る手かがりとなる。「児童作品」は詩、作文、小説などの形式で、毎号十編ほどが掲載された。ここからは読者たちの愛国心が垣間見えると同時に戦時下の児童の生活史をうかがう手がかりも得られる。新 25 号（1933.10.1，児童創作専号）の廖鴻熙の小説「一個模範学生（ある模範学生)」は 9 歳の培生が母と服を買いに行き、母が日本製の綺麗な絹織物を手に取ったところ、先生に国貨を買えと言われたと母を説得して買うのをやめさせる話だ。国貨購入の意識が児童にも強く浸透しており、同号の朱炳相の随筆「街頭速写（街頭スケッチ)」は「国貨」の文字を貼りながら日本製商品を扱う商店を目撃した報告となっている。軍隊ごっこも日常生活の一部になっていたようだ。新 29 號（1933.12.1）掲載、「児童們的遊戯（児童たちの遊戯)」の著者邱仰山はおそらく教師なのだが、散歩に出た際に児童たちが戦争ごっこをしているのに出くわす。児童たちは中国義勇軍と日本軍に分かれて戦い、義

勇軍が勝って日本軍の児童を激しく打ちのめして泣かしてしまう。

児童の投稿には、抗日や救国について時には大人顔向けのアジテーションも見られる。また編集部が提供した内容よりも過激な文が載ることもあった。新 20 号（1933.7.16）の「児童通信」に掲載された厳広楣「給在前線殺敵的哥哥的一封信（前線で敵を殺す兄への手紙）」はとりわけ過激だ。タイトル通り兄への手紙の形式をとり、兄は妻と子を残して日本軍と戦うため前線にいる。

> お兄さん！ 戦場にいるのは面白いですか？ 僕は戦場にいるのはきっと面白いと思います。どうしてかって？ だって戦場では毎日少なくとも何人かの敵を殺せるんですもの。僕らの方はね、とっても残念がっていますよ。僕らに殺させてくれる敵がいないというだけでなくて、そのうえ苦悶による束縛を受けています。僕たちはなんて不幸なんだろう！ お兄さん！ お願いですから、あの強盗たちを殺し尽くさず、僕らが殺せるようにいくらか残しておいてください！

この手紙はさらに、兄に首を落とされても全身から血を流して屍になって帰ってくるようなことがあっても決して敵に背を向けて逃げるな、志と愛国を貫けば国民は熱烈に追悼してくれるし、妻子も安心するからと伝える。そして日本が袁世凱に突きつけた 21 箇条の要求の回答期限日である「五九国恥日」の日付で結ばれる。

（b）自由画募集と（c）作文コンテストと読者投稿コーナーに注目した理由は二つある。一つ目は、「募集」という戦時下や植民地支配において文化統制にも使われている普遍的な手段が児童雑誌にも見られることであり、コンテストという形式により、児童は競って編集部の意向に合わせた作品を作るようになっていく。二つ目は、児童が愛国プロパガンダの受け手から発信者へと変貌していくプロセスの一部として、コンテストが愛国児童生産システムの一翼を担っていることだ。徐蘭君は『児童与戦争：国族、教育及大衆文化』（2015，北京大学出版社）の中で、抗戦時期の児童に対する抗戦プロパガンダにおいて、児童はプロパガンダの受け手であると同時に、主導者でもあったことを指摘している[2]。このことは、今後の研究のために留意すべき大きな問題だ。

第 3 期は軍国教育一色の内容になる。この段階で『児童世界』は完全なる児童向け抗日プロパガンダ誌へと変貌を遂げた。

それまでは戦時中とはいえ、軍国教育一色の内容に一律覆われるわけではなく、戦局に応じていくつかの高まりが見られた。つまり満洲事変および第一次上海事変の時期と 1937 年 7 月 7 月の盧溝橋事件に端を発する日中戦争（日華事変、支那事変、日支事変名称が使用される場合もある）および 1937 年 8 月の第二次上海事変直後は戦争関連の

[2] 徐蘭君『児童与戦争：国族、教育及大衆文化』第一章「国難教育与戦争経験日常化：国防遊戯与児童戦時読本」（北京大学出版社，2015）参照。

特集記事が著しく増加する。

この傾向は日本の児童雑誌にもうかがえる（図11）。日本の場合はさらにもう一つ山があり、太平洋戦争突入時にも一つのピークがあった。それ以降は愛国一色の内容に染まっていく。いくつかのピークを越えながら大日本雄辯会講談社の『少年倶楽部』は完全に軍国少年養成雑誌になったし、『少年倶楽部』ほど過激ではなかったが、『コドモノクニ』や『子供之友』にも同じ傾向がうかがえる。『観察絵本キンダーブック』は1942（昭和17）年3月号から『観察絵本ミクニノコドモ』へと大きく方向転換をした。

戦時下における日中児童雑誌の比較はまだ本格的には行なわれていない。本研究が今後行なわれるべき研究のためのたたき台となることを願う。

図11『少年倶楽部』
1937（昭和12）年12月号

二、今後の研究の発展のための課題

二年に及ぶ研究期間に、国内外の戦時期児童メディア研究を広く照覧し、今後研究を発展させていく上でのいくつかの課題が見えてきた。国内の研究ではやや情緒的に傾いて方法論を欠く記述的なものが多く、また国内外を通じ、特定の国や地域を扱ったものがほとんどであることだ。近年欧米全域を視野に入れた研究も出てきたが、同時期のアジアの状況については関心の外にある。真の国際的視野という意味では、いわば総論なしで各論のみが論じられている状況が長く続いていた。総論を構築すべく方法を構想している過程で、問題点を以下の二点に絞ることができた。

（ⅰ）先述したように徐蘭君（2015）は、抗戦時期の児童がプロパガンダの受け手でもあり主導者でもあったと指摘している。今持つべきはまさしくこの視点で、児童は単に戦争に巻き込まれる、受身の存在であるばかりでなく、積極的に「加担」せざるを得ない。それではどのように「加担」させられていったのか。そのシステムとプロセスを解明する必要がある。

（ⅱ）国際的比較の視点の欠如について。たとえば日中の児童雑誌は、創刊時の影響関係を除けば、比較研究は私が試みるまで皆無であった。アジアと欧米の児童雑誌の比較に至っては、これまで全く試みられておらず、双方が互いの研究状況を知らないままでいる。

この二点への取組みに際し、二つの研究著作が方法論的に有用なものとして視野に入

った。

①Eberhard Demm(2016), Kinder und Propaganda im Ersten Weltkrieg: Eine transnationale Perspektive［第一次世界大戦における児童とプロパガンダ：トランスナショナルな視点から］, In: Alexander Denzler, Stefan Grüner und Markus Raasch (Hrsg.) *Kinder und Krieg：von der Antike bis in die Gegenwart*［児童と戦争：古代から現代まで］ ,105-130,De Gruyter Oldenbourg

②Peter Lukasch(2021), *Der muss haben ein Gewehr: Krieg, Militarismus und patriotische Erziehung in Kindermedien vom 18. Jahrhundert bis in die Gegenwart*［男は銃を持たねばならぬ：18 世紀から現代までの児童メディアにおける軍国主義及び愛国的しつけ］, Books on Demand

①はそれまで一つの国についてのみ行なわれていた第一次世界大戦中の児童に関する歴史研究を、副題の通り「トランスナショナルな視点」を用いて、欧米全域の状況を比較した画期的なもので、特にプロパガンダに着目し、次のような比較項目を設定している。「学校での教化、児童書や雑誌での宣伝、戦争ゲーム、子どもの経済的搾取、消費の放棄、犠牲を払う意思、国民の義務感といった戦争志向の価値観の宣伝、プロパガンダの拡大要因としての子どもの利用、プロパガンダ的カルト的人物としての子どもの英雄や殉教者」(p.106)。

②はドイツを中心にしながらも欧米全域を視野に入れた、18 世紀から現代にまで及ぶプロパガンダとその影響を扱う大部の著作で、国ごと、時期ごとのプロパガンダ戦略の特徴を明らかにし、また図像学的手法を用いた戦時下における児童書の比較にも成功している。

この二つの研究のトランスナショナルな視点、比較項目、分析方法、図像学的手法は私の研究にも極めて有効であり、またこれらが描く欧米の戦時児童向けプロパガンダの様相と日本・中国のものとの類似は、欧米とアジアを接続するという次の一歩への自信を深めさせた。今後の研究は、欧米間で培われてきた比較研究とアジアの研究をつなぐ役割をも担うべきである。

この問題の学術的解決を困難にしている二つの状況を指摘したい。その一つは歴史的背景の違い、もう一つは関連資料へのアクセスの不便さである。

まず一点目について、日本の研究では児童を戦争に加担させたメディアの営みを負の側面として反省し、否定的に捉えるが、中国ではそもそも抗日プロパガンダは全肯定されてしかるべきもので、民間ではいまだに抗日少年英雄の物語が好まれている。後述する資料の未整備に加えてそれぞれの国の立場や根本的な思想的背景の違いもあり、戦時期児童メディアに対して国際的な比較をし、総論的見解を導き出すことは実は非常に困難だという状況があることは否定できない。欧米では戦時中の児童に関する歴史研究は 1990 年代からまずポーランドやオーストリア等で始まり、その後ドイツが続いた。これらはまず第一次世界大戦のものから始まったが、近年では第二次世界大戦を含んだ研

究も見られるようになり、当初の特定の国の研究から、国際的比較研究へと徐々に発展してきた。その中で培われた方法論はアジアにおける国々の立場を超えた研究にも有効と思われる。残された課題として、欧米とアジアを接続した比較研究が皆無であることだ。本研究は戦時期児童メディアの真の国際的比較研究の第一歩となることを目指している。

二点目は関連資料へのアクセスの不便さである。先に掲げた②Peter Lukasch(2021)の研究に刺激を受けたことと、2022 年度はサバティカルを取得できたことから、2023 年 1 月にドイツのベルリン州立図書館（ベルリン)、バイエルン州立図書館（ミュンヘン)、イギリスの大英図書館（ロンドン）で資料調査を行なった。ここでの資料の閲覧に際し、いくつかの問題に直面した。たとえばベルリン州立図書館ではナチ党系統の児童雑誌（*hilf mit* など）は貴重書扱いで、閲覧はできるものの、複写、スキャン、撮影などは許されていない。バイエルン州立図書館は貴重書は別の保管場所からの取り寄せになり、申請から少なくとも四日はかかるため、長期滞在の必要がある。これらの図書館は subito（国際的な図書館の文献提供サービス）に加盟しているため、運送費を負担することで借り出し可能なものもあるが、全ての資料が貸し出し可能なわけではなく、また所属機関が subito に加盟していない場合は個人の資格で申し込むことになるが、ハードルが高い。また、いずれの図書館でも戦時中の児童雑誌のデジタル資料化は全く行なわれておらず、他の歴史資料に較べて公開の優先順位は低いものとして扱われているようだ。

三、研究総括

これまで研究の背景、研究報告、今後の課題について述べた。本稿が報告書であることを鑑み、研究の成果と公開状況、助成金の使途についても記したい。

（1）研究成果の公開

助成金を受領した者の使命として、研究成果を学界に公開すると同時に民間へ還元すること、最新の研究成果を大学講義に導入することなどが求められると考える。まず研究成果の学術的公開に関しては以下の一点を掲げたい。

佐々木睦「児童雑誌と戦争　――『児童世界』を中心に 附 :『児童世界』戦争関連記事目録（新 1 号～新 30 号)」、(東京都立大学『人文学報』518-12、2022 年 3 月）

最新の研究成果の授業への導入については、

①2021 年度後期　東京都立大学人文社会学部「文学概論」（オムニバス講義）

②2021 年度後期　中央大学文学部（非常勤）「文学概説 B」

でそれぞれ三回を充てて、本研究課題に関する講義を行なった。新型コロナ流行の状況を鑑み、①はオンライン、②はオンデマンドでの開講となった。豊富な図像資料を示し

ながら、戦時下の児童教育や児童雑誌が果たした役割について講義したが、戦争当時の資料を見ることは初めてで衝撃を受けたという反応が多かった。

また研究成果の民間への還元に関しては、社会人を対象とした東京都立大学オープンユニバーシティ 2023 年度講座として「海をわたったのらくろ　日中児童雑誌交流史」を 2023 年 4 月～6 月に開講予定である。

（2）海外出張

本研究助成を取得できたにも関わらず、新型コロナの影響で中国への渡航はかなわなかった。その代替地として入境規制が緩和された香港で 2022 年 12 月 6 日から 2022 年 12 月 14 日まで調査を行なった。香港大学図書館所蔵「香港コレクション」の資料を調査し、日中戦争期の児童書関連文献（主として『児童画報』リプリント本）を中心に資料を収集し、日本軍占領下香港で発行されていた『香港日報』（中文版）のマイクロフィルムも一部スキャンデータを入手することができた。

（3）助成金の使途

本助成金では、上記海外調査費以外に本研究課題に関連するまとまった図書資料を購入することができた。これらは今後の研究にも役立つ財産となるとなるであろう。また、二名の大学院生を臨時職員として雇用し（2021 年 8 月～9 月）、『児童世界』のデータ入力を行なってもらった。このデータに基づき、『児童世界』戦争関連記事目録を作成中で、その新 1 号～新 30 号分を上記論文に附し、いわば試作版として先行公開した。データの入力に尽力してくれた朱沁雪君、周舒静君（いずれも当時東京都立大学人文科学研究科博士後期課程 3 年）に御礼を申し上げる。

終わりに

以上をもって研究報告とさせていただく。新型コロナの影響でこの二年間は教育者としても研究者としてもつねに選択と決断が迫られる苦しい時期であった。このような状況にも関わらず、本研究助成を取得できたことで、充実した研究活動を行なうことができたことに感謝したい。海外出張がままならず、研究期間を一年延長させていただいたが、快くお認めいただいた。関係者各位に心より御礼を申し上げる次第である。

本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団 2020 年度「アジア歴史研究助成」による研究成果の一部である。